

金山遺跡3

# 金山遺跡3

第1・4次調査

大野城市文化財調査報告書 第181集



大野城市文化財調査報告書 第181集

大野城市教育委員会

2020

大野城市教育委員会

# 金山遺跡 3

第1・4次調査

大野城市文化財調査報告書 第181集



2020

大野城市教育委員会

# 序

大野城市は、福岡平野の南部に位置し、西暦665年に築かれた日本最古の朝鮮式山城「大野城」にその名を由来する、古い歴史と豊かな自然に恵まれた緑の街です。市内には、大野城跡・水城跡・牛頸須恵器窯跡といった国指定史跡をはじめとして、多くの文化財があります。

金山遺跡は、市の南東部、大城山（通称四王寺山）から西に延びる丘陵上にあります。これまでに行われた発掘調査の結果、古墳時代を中心とする集落の跡が見つかっています。今回報告する調査地は小規模なものですが、その集落の一部と考えられる遺構が確認され、地域の歴史を理解する上で貴重な結果を得ることができました。

本書が今後、地域の歴史・文化財への理解を深める一助となるとともに、教育や學術分野で広く活用されることを心から願っています。

最後になりましたが、発掘調査に際してご理解ご協力をいただいた関係各位、また、現地において多くのご指導を賜りました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月19日

大野城市教育委員会  
教育長 吉富 修

# 例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が実施した金山遺跡第1次・第4次発掘調査の報告書である。
2. 第1次調査は徳本洋一が担当し、期間は平成11年9月17日から同年12月3日まで、調査面積は532㎡である。第4次調査は林潤也が担当し、期間は平成25年11月26日から同年12月9日まで、調査面積は約90㎡である。
3. 第1次調査の遺構の実測は徳本が行い、製図は吉田薫が行った。第4次調査の遺構の実測は林が行い、製図は吉田が行った。
4. 第1次調査の遺構写真は徳本が撮影した。第4次調査の遺構写真は林が撮影した。
5. 遺物の実測は古賀栄子が行い、製図は古賀、小嶋のり子が行った。
6. 実測図中の方位は磁北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
7. 本書掲載の遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会が保管・管理している。
8. 本書の執筆・編集は徳本が行った。

# 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	
(1) 第1次調査	1
(2) 第4次調査	1
2. 調査組織	
(1) 第1次調査	1
(2) 第4次調査	2
II. 位置と環境	2
III. 調査の結果	5
1. 第1次調査	
(1) 調査の概要	5
(2) 遺構と遺物	5
(3) 小結	12
2. 第4次調査	
(1) 調査の概要	13
(2) 遺構と遺物	13
(3) 小結	16
3. まとめ	16

# 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1/25,000)	3
第2図 金山遺跡調査地点位置図 (S = 1/5,000)	4
第3図 金山遺跡第1次調査地点遺構配置図 (S = 1/200)	6
第4図 金山遺跡第1次調査地点 SX01実測図 (S = 1/60)	7
第5図 金山遺跡第1次調査地点 SX02実測図 (S = 1/40)	8
第6図 金山遺跡第1次調査地点 SD01実測図 (S = 1/100、1/80)	9
第7図 金山遺跡第1次調査地点 SD01出土遺物実測図1 (S = 1/3、1/4)	10
第8図 金山遺跡第1次調査地点 SD01出土遺物実測図2 (S = 1/3、1/2)	11
第9図 金山遺跡第4次調査地点遺構配置図 (S = 1/100)	12
第10図 金山遺跡第4次調査地点出土遺物実測図1 (S = 1/3、1/2)	13
第11図 金山遺跡第4次調査地点出土遺物実測図2 (S = 1/3、1/2)	14
第12図 大城山西麓主要遺跡位置図 (1/15,000)	18

# 表目次

第1表 出土遺物観察表	19
-------------	----

# 図版目次

- 図版 1 ① 金山遺跡第 1 次調査地点全景 1
  - ② 金山遺跡第 1 次調査地点全景 2
  - ③ 金山遺跡第 1 次調査地点全景 3
- 図版 2 ① 金山遺跡第 4 次調査地点調査前状況
  - ② 金山遺跡第 4 次調査地点作業風景
  - ③ 金山遺跡第 4 次調査地点完掘状況
- 図版 3 ① 金山遺跡第 4 次調査地点 SC01検出状況
  - ② 金山遺跡第 4 次調査地点 SC01土層
  - ③ 金山遺跡第 4 次調査地点 SC01床面検出状況
- 図版 4 ① 金山遺跡第 4 次調査地点 SC01完掘状況
  - ② 金山遺跡第 4 次調査地点 SC01屋内土坑遺物出土状況
  - ③ 金山遺跡第 4 次調査地点 SX01土層
- 図版 5 ① 金山遺跡第 4 次調査地点 SX01完掘状況
  - ② 金山遺跡第 4 次調査地点 SD01土層
  - ③ 金山遺跡第 4 次調査地点 SD01完掘状況
- 図版 6 遺物写真 1
- 図版 7 遺物写真 2
- 図版 8 遺物写真 3
- 図版 9 遺物写真 4

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

### (1) 第1次調査

金山遺跡は現在の大野城市大城四丁目付近に所在する。1980年に福岡県教育委員会が刊行した『福岡県遺跡等分布地図（筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編）』には弥生時代の散布地として記載されているが、平成10年度以前には発掘調査が行われたことはなく、その詳細は不明であった。

平成11年、金山遺跡の分布範囲内で、個人事業者による宅地開発及び住宅建設が計画された。これを受けて当該地において確認調査を実施したところ遺構が確認され、当該地が金山遺跡であることが明らかになった。そのため、同年9月8日付けで事業者から埋蔵文化財保護法第93条に基づく届を提出するとともに、事業者と本市教育委員会の間で遺跡の保全についての協議を続けたが、遺跡が破壊される部分については発掘調査を行うことで協議が整った。これが第1次調査であり、平成11年9月17日から同年12月3日にかけて行われた。調査面積は532㎡である（開発面積は2,575㎡）。

### (2) 第4次調査

第1次調査の後、平成22年10月5日から11月11日にかけて行われた第2次調査、平成25年7月16日から11月13日にかけて行われた第3次調査の結果、金山遺跡は古墳時代前期を中心とする集落遺跡であることが明らかとなってきた。

第4次調査地は遺跡東側の隣接地に当たる。平成25年、当該地に個人専用住宅の建設が計画された。これを受けて試掘調査を行ったところ遺構が確認され、当該地が金山遺跡の範囲内に含まれることが明らかになった。そのため、同年11月21日付けで事業者から埋蔵文化財保護法第93条に基づく届を提出するとともに、遺跡の保全について事業者と本市教育委員会の間で協議を続けたが、遺構が破壊される部分については発掘調査を行うことで協議が整った。調査は平成25年11月26日から12月9日にかけて行われ、調査面積は約90㎡であった。

## 2. 調査組織

第1次・第4次調査それぞれの時点における調査組織は以下の通りである。

### (1) 第1次調査時（平成11年度）

大野城市教育委員会	教育長	堀内貞夫
同	教育部長	高橋正治
同	社会教育課長	片岡 猛
同	同	文化財担当係長 舟山良一
同	同	主任技師 石木秀啓
同	同	主任技師 徳本洋一
同	同	主任技師 丸尾博恵
同	同	主事 大道和貴

同	同	囑託	熊代昌之
<b>(2) 第4次調査時 (平成25年度)</b>			
大野城市教育委員会	教育長		吉富修
同	教育部長		見城俊明
同	ふるさと文化財課長		鐘ヶ江義則
同	同	係長	平田哲也
同	同	係長	徳本洋一
同	同	主査	石木秀啓
同	同	主任技師	林潤也
同	同	主任技師	早瀬賢
同	同	主任技師	上田龍児
同	同	技師	齋藤友紀
同	同	主事	岡本晃一
同	同	囑託	高橋幸作
同	同	囑託	藤元正太
同	同	囑託	松本周作
同	同	囑託	天野正太郎
同	同	囑託	梶原詩織

## II. 位置と環境

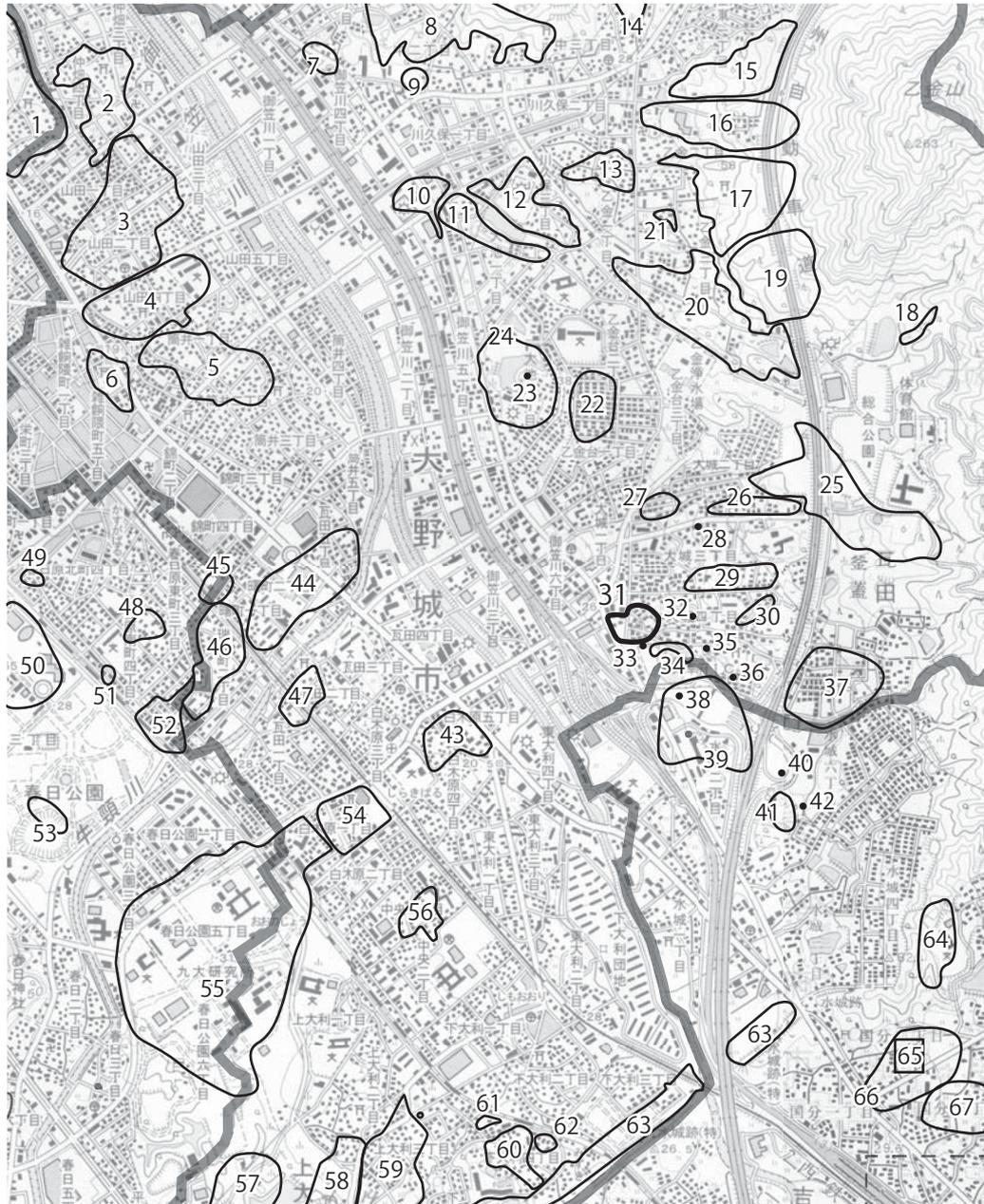
大野城市は福岡県の南東部の一角に位置し、北を福岡市に接し、東を月隈丘陵から派生する乙金山・四王寺山、南を牛頸山系、西を脊振山系によって囲まれており、これらに囲まれた平野に住宅地が展開する。市域の中央部を御笠川が貫流し、牛頸川がこれに合流している。また、JR 鹿児島本線、西鉄福岡大牟田線、国道3号線等の主要な交通網が市内を南北に通っており、交通の要衝となっている。市域はヒョウタン形の平面形を呈し、面積は26.89km<sup>2</sup>である。

金山遺跡は、市の東端付近、大城山西側山麓の小丘陵上に立地する。標高は約27m～30mを測る。今回報告する、第1次調査地と第4次調査地との距離は、最も近い箇所約15mとほぼ隣接している。

金山遺跡は、古墳時代を中心とする遺跡であるため、以下、市内にある旧石器時代から古墳時代までの遺跡について概観する。

旧石器時代の遺跡としては、中ノ原遺跡、金ヶ浦遺跡、釜蓋原遺跡、成屋形遺跡等があげられる。これらはいずれも出土遺物からの確認で、明確な遺構は確認されていない。

縄文時代では、釜蓋原遺跡と雉子ヶ尾遺跡において早期の土器が出土する。釜蓋原遺跡では多数の石鏃が出土・採集されている。原田遺跡、中ノ原遺跡でも縄文時代の遺物が採集されており、薬師の森遺跡、石勺遺跡では遺構が確認されている。また、成屋形遺跡は丘陵北側一帯に広がりを見



- |            |             |                 |             |             |
|------------|-------------|-----------------|-------------|-------------|
| 1. 井相田A遺跡  | 16. 王城山古墳群  | <u>31. 金山遺跡</u> | 46. 瑞穂遺跡    | 61. 末次遺跡    |
| 2. 川原遺跡    | 17. 古野古墳群   | 32. 釜蓋古墳        | 47. 国分田遺跡   | 62. 唐土遺跡    |
| 3. 御笠の森遺跡  | 18. 此岡古墳群   | 33. 金山古墳        | 48. 駿河E遺跡   | 63. 水城跡     |
| 4. 宝松遺跡    | 19. 原口遺跡    | 34. 金ヶ裏遺跡       | 49. 駿河D遺跡   | 64. 陣の尾遺跡   |
| 5. 村下遺跡    | 20. 薬師の森遺跡  | 35. 深町古墳        | 50. 駿河A遺跡   | 65. 筑前国分尼寺  |
| 6. 雑餉隈遺跡   | 21. 花園遺跡    | 36. 笹原古墳        | 51. 駿河B遺跡   | 66. 国分松本遺跡  |
| 7. 塚口遺跡    | 22. 銀山遺跡    | 37. 釜蓋原遺跡       | 52. 原ノ口遺跡   | 67. 国分千足町遺跡 |
| 8. 御陵前ノ椽遺跡 | 23. ウド古墳    | 38. 成屋形古墳       | 53. 春日公園内遺跡 |             |
| 9. 御陵古墳群   | 24. ウド遺跡    | 39. 成屋形遺跡       | 54. 後原遺跡    |             |
| 10. ヒケシマ遺跡 | 25. 雉子ヶ尾遺跡  | 40. 裏ノ田窯跡       | 55. 御供田遺跡   |             |
| 11. 中・寺尾遺跡 | 26. 雉子ヶ尾古墳群 | 41. 裏ノ田遺跡       | 56. ハザコ遺跡   |             |
| 12. 森園遺跡   | 27. 雉子ヶ尾遺跡Ⅲ | 42. 裏ノ田古墳       | 57. 梅頭遺跡群   |             |
| 13. 松葉園遺跡  | 28. 雉子ヶ尾遺跡Ⅱ | 43. 原ノ畑遺跡       | 58. 本堂遺跡群   |             |
| 14. 唐山遺跡   | 29. 原田遺跡    | 44. 石勺遺跡        | 59. 上園遺跡    |             |
| 15. 善一田古墳群 | 30. 曲り目遺跡   | 45. 駿河C地点       | 60. 谷川遺跡    |             |

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)



せる。

弥生時代になると、福岡平野全域で遺跡が増加するが、市内では北部で遺跡が多くなる。特に、大城山等東側の山々から西に延びる丘陵先端部及びその先の平地部に、墳墓遺跡が集中する傾向がある。前者の代表的なものとして、御陵前ノ椽遺跡、森園遺跡、中・寺尾遺跡、後者ではヒケシマ遺跡があげられる。これらの他に、仲島遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡等では集落が確認されており、中でも仲島遺跡は鎌倉時代まで存続している。

金山遺跡では、古墳時代から集落が営まれるようになる。この時代の集落遺跡としては、原田遺跡、石勺遺跡、村下遺跡、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、上園遺跡等があげられる。中でも、上園遺跡は牛頸須恵器窯跡群の初期工人が営んだ集落・工房跡であることが分かっている。

金山遺跡付近では数多くの古墳が造営されており、それらのうち、笹原古墳、成屋形古墳、雉子ヶ尾古墳、古野古墳群、大城山古墳群、善一田古墳群等が発掘調査されている。また、乙金窯跡、雉子ヶ尾窯跡、裏ノ田窯跡等の須恵器窯跡が古墳時代から奈良時代にかけて操業していたことが分かっている。

## Ⅲ. 調査の結果

### 1. 第1次調査

#### (1) 調査の概要

調査地は大野城市大城四丁目252-5他に所在する。大城山から西へ延びる丘陵の先端部に当たり、標高は26m前後を測る。調査は、平成11年9月17日から同年12月3日にかけて実施し、調査面積は532㎡である。

今回の調査地は、ほぼ中央に小規模な谷があり、その東西両側が斜面になっていた。西側の斜面はごく緩やかな傾斜であったが、東側の斜面は傾斜が急で、最大で1.8mの比高差があった。この調査区東側については、削平と攪乱が激しく、遺構の残存状況が悪かった。

調査の結果、溝状遺構1基、不整形土坑2基、多数のピットが検出され、主に古墳時代前期の土師器が出土した。

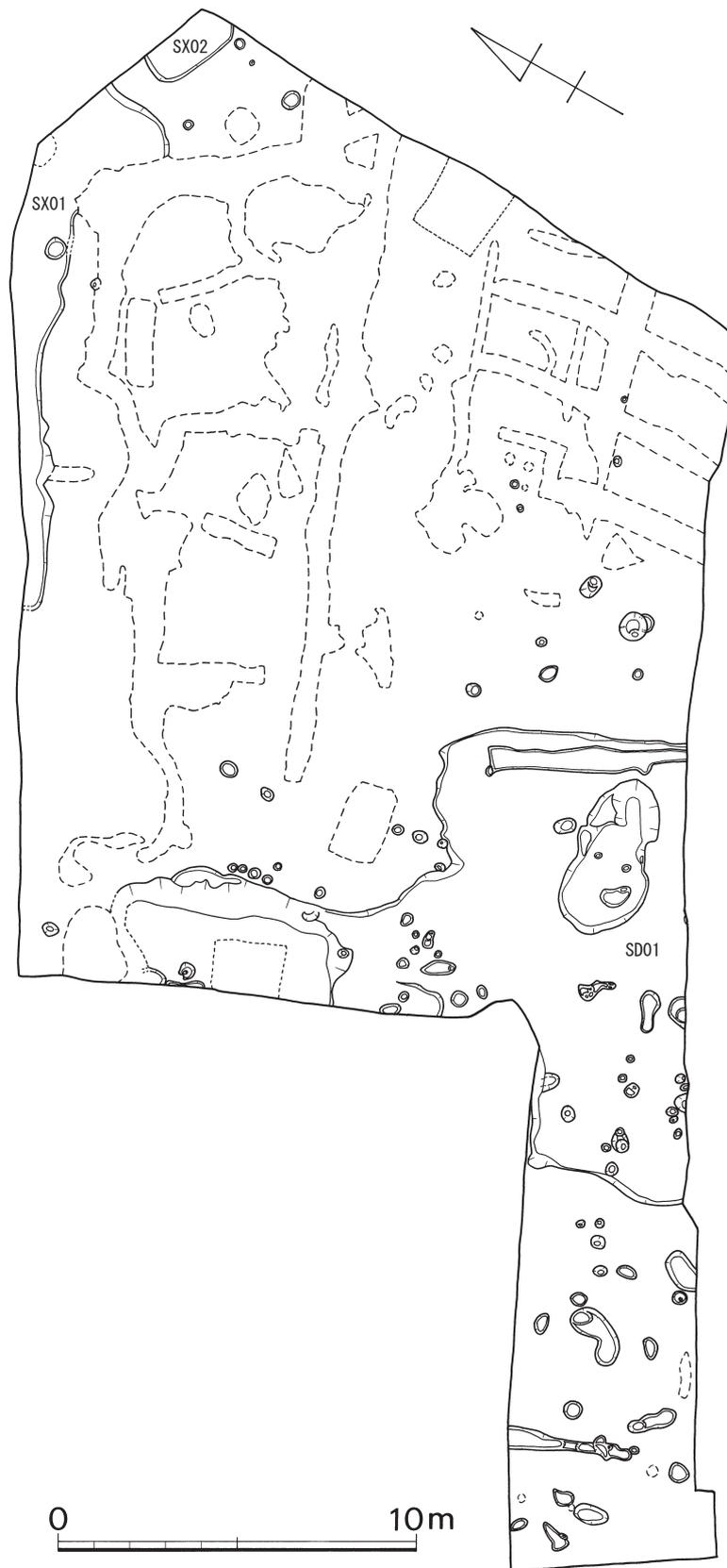
#### (2) 遺構と遺物

##### ① SX01 (第4図、図版1)

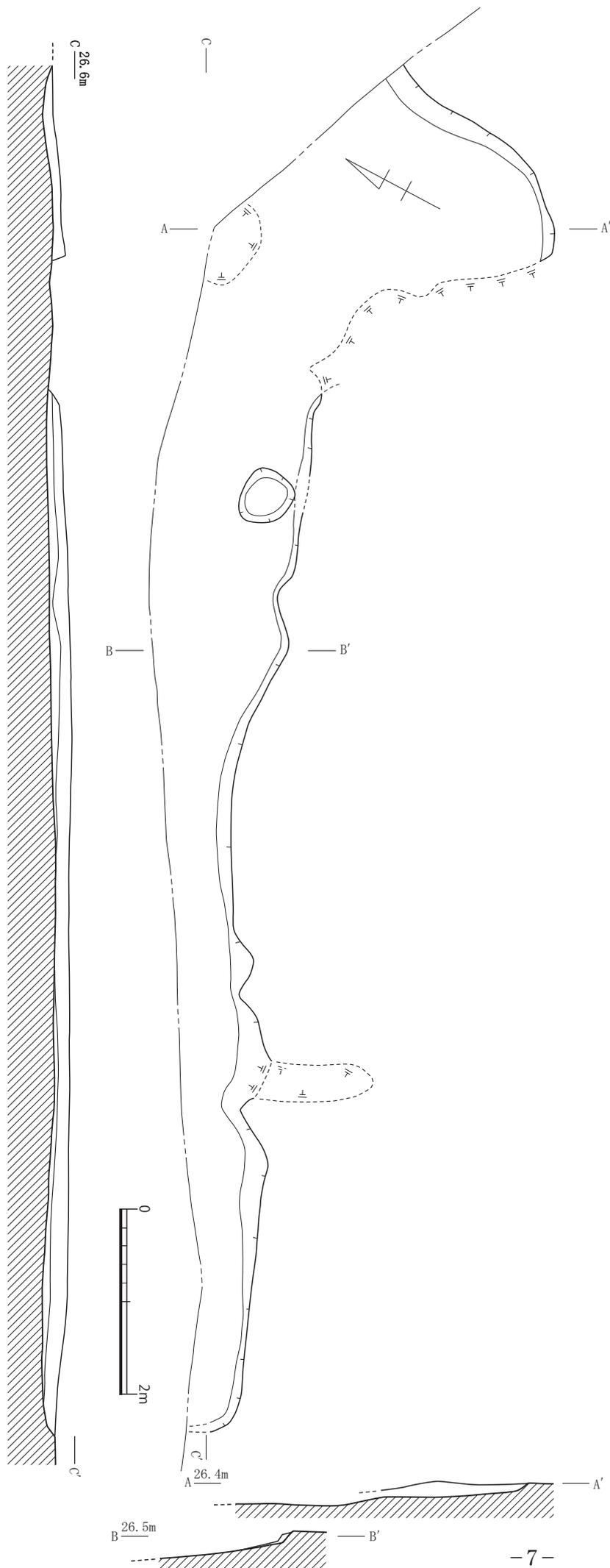
調査区の北端部で検出され、さらに調査区外に延びるものと考えられる。一部を攪乱溝によって破壊されている。

検出された範囲では、「し」の字を倒立させたような不整形を呈する。最大長さ14.9m、最大幅3.7mを測る。壁は直線状に外に開くように立ち上がり、最大深さは0.28mを測る。床面はおおむね平坦であり、直径0.6m、深さ約0.3mのピット1基を床面で検出した。

出土遺物はなかった。



第3図 金山遺跡第1次調査地点遺構配置図 (S = 1/200)



② SX02 (第5図、図版1)

SX01から約1m東で検出された。やはり調査区外に延びるが、その部分を補って考えると、長軸2.7m、短軸1.5m程度の隅丸方形を呈するものと思われる。最大深さは0.35mを測り、床面はほぼ平坦だが、東から西に向かって傾斜している。

出土遺物はなかった。

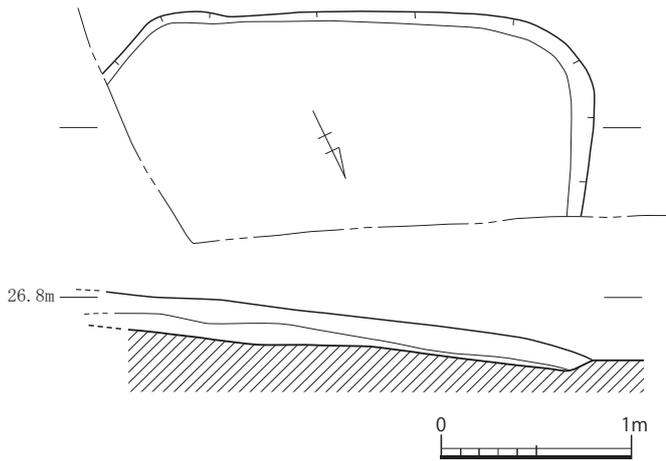
③ SD01 (第6図、図版1)

調査区のほぼ中央部、最も標高が低い場所で検出され、調査区外に延びる。「凸」の字を歪めたような不整形を呈し、最大長約16m、最大幅約13mを測る。床面はほぼ平坦で、南から北へ緩やかに傾斜する。床面からはピット、溝状の掘り込み、土坑状の掘り込みが検出され、これらの深さを入れると最大深さは約1.2mを測る。

埋土からは多数の遺物が出土したが、それらの多くは土師器の小片であった。ほぼ完形の土師器甕が1点、倒立した状態で出土したが、底面からいわゆる「浮いた」状態であった。これらの他には、弥生土器・須恵器・磁器・石製品が若干出土した他、拳大の礫が大量に出土した。それらは、地山に含まれる自然礫であり、人為的な配置あるいは投入等は考えられない状態であった。

出土遺物 (第7・8図、図版6・7)

第4図 金山遺跡第1次調査地点 SX01実測図 (S=1/60)



第5図 金山遺跡第1次調査地点 SX02実測図  
(S = 1/40)

#### 弥生土器

##### 大型甕 (1)

大型の甕の、口縁部から体部の一部にかけての破片である。焼成は良好で、胎土中に径4mm以下の白色砂粒を多く含む。調整は、体部外面にはハケ目を施す。体部内面及び口縁部内外面は、磨滅のため分かりにくいだが、部分的にハケ目の痕跡が残る。

##### 体部 (2)

甕と思われる器種の体部の破片である。外面に幅約3.3cmの突帯を巡らせ、そこに

ハケ原体による「X」字状の施文を施す。焼成は良好で、胎土に径3mm以下の微細な白色粒子を多く含む。調整は外面がハケ目、内面は磨滅のため分かりにくいだが、部分的にハケ目がわずかに残る。また、突帯と体部を接着する部分に、横方向のナデの痕跡が残る。

##### 底部 (3)

甕と思われる器種の底部である。外面に平行タタキ、内外面に指オサエの痕跡が残る。内面の一部が黒変している。

なお、以上(1)～(3)は同一個体である可能性がある。

##### 鼓形器台 (4)

口縁部から頸部にかけての一部のみ残存する。焼成は良好である。調整は口縁部外面及び体部内外面に回転ナデを施すが、口縁部内面は磨滅のため不明である。頸部付け根の上下に2条の突帯を有する。外面は破片全面に煤が付着する。

##### ミニチュア土器 (5)

底部からやや外湾しながら開く、体部下半のみ残存する。焼成は良好であり、調整は体部内外面及び底部内面に不定方向のナデを施し、底部外面は磨滅のため不明である。内面の1ヶ所に工具の痕跡が残る。

#### 土師器

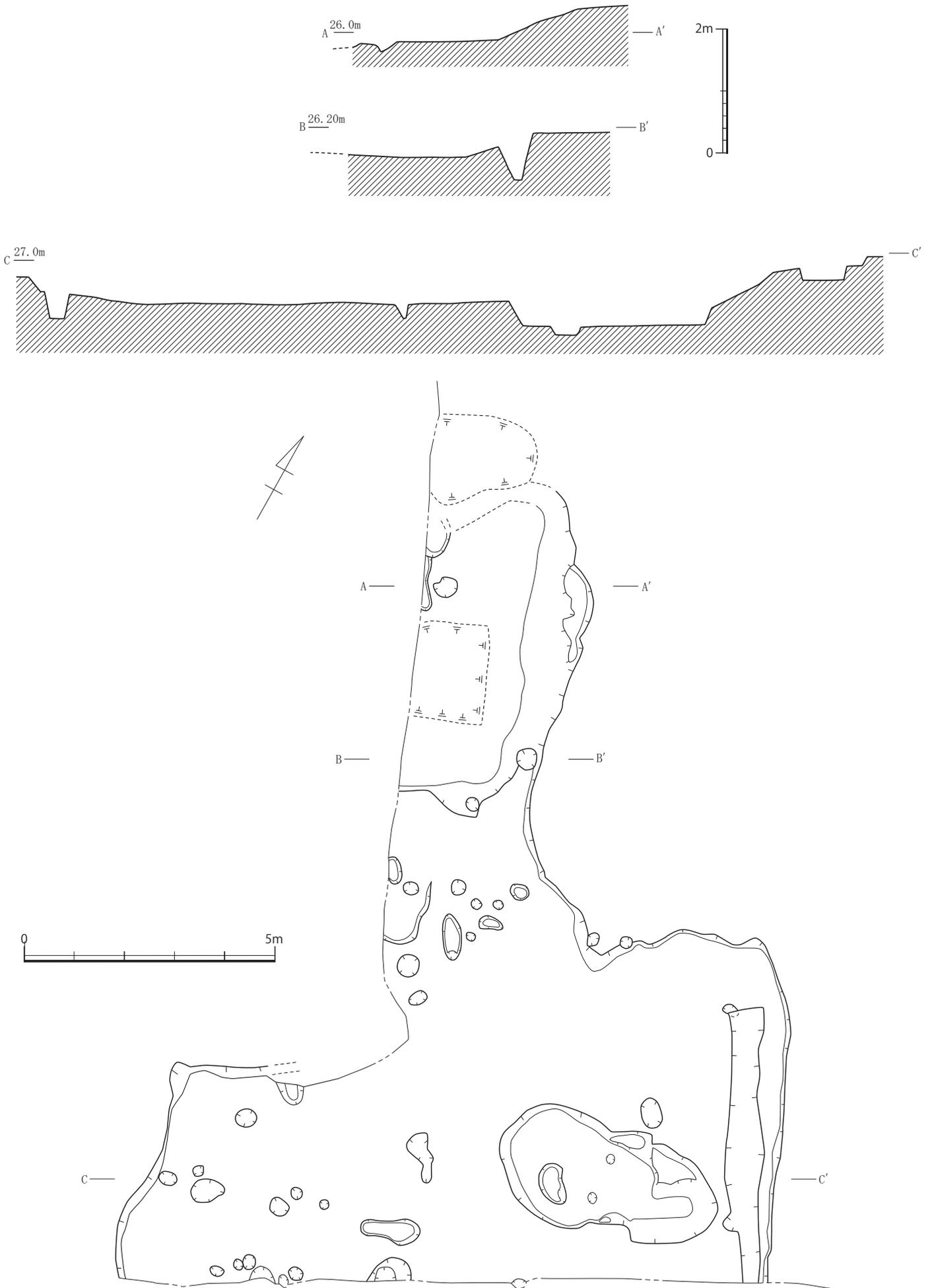
##### 甕 (6)

溝の底面に近い場所から倒立した状態で出土したもので、口縁部を約2分の1欠損するもののほぼ完形である。焼成は良好で、調整は体部外面にハケ目、口縁部内外面に回転ナデを施し、内面はヘラケズリの後不定方向のナデで仕上げる。外面の2ヶ所に黒斑が見られる。底部に、直径約3.5cmの焼成後穿孔がある。

#### 須恵器

##### 杯蓋 (7)

口縁部の小片である。かえりは短く、口縁部よりも下がない。焼成は良好で、灰色に焼き締まっている。調整は内外面共に回転ナデである。

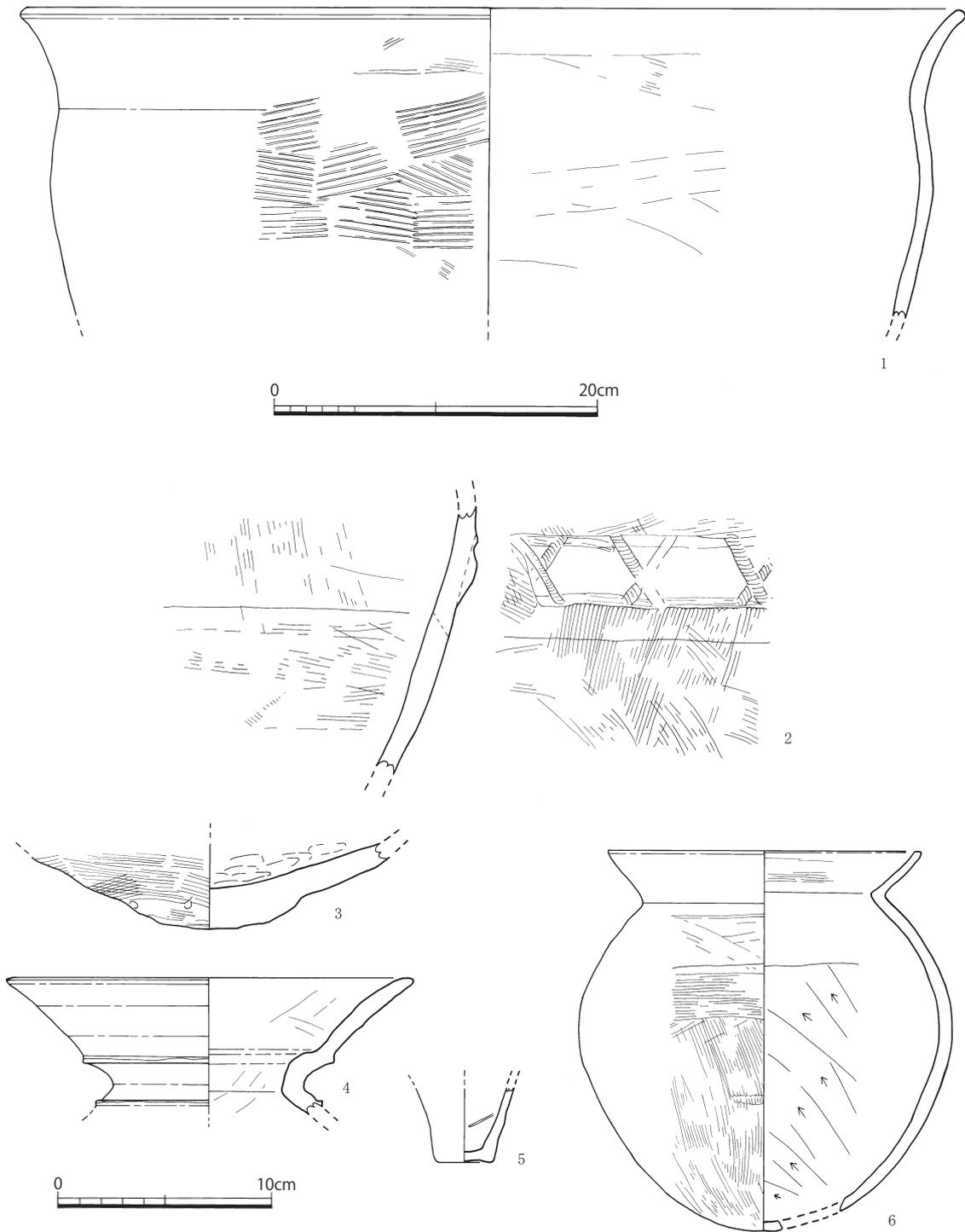


第6図 金山遺跡第1次調査地点SD01実測図 (S=1/100、1/80)

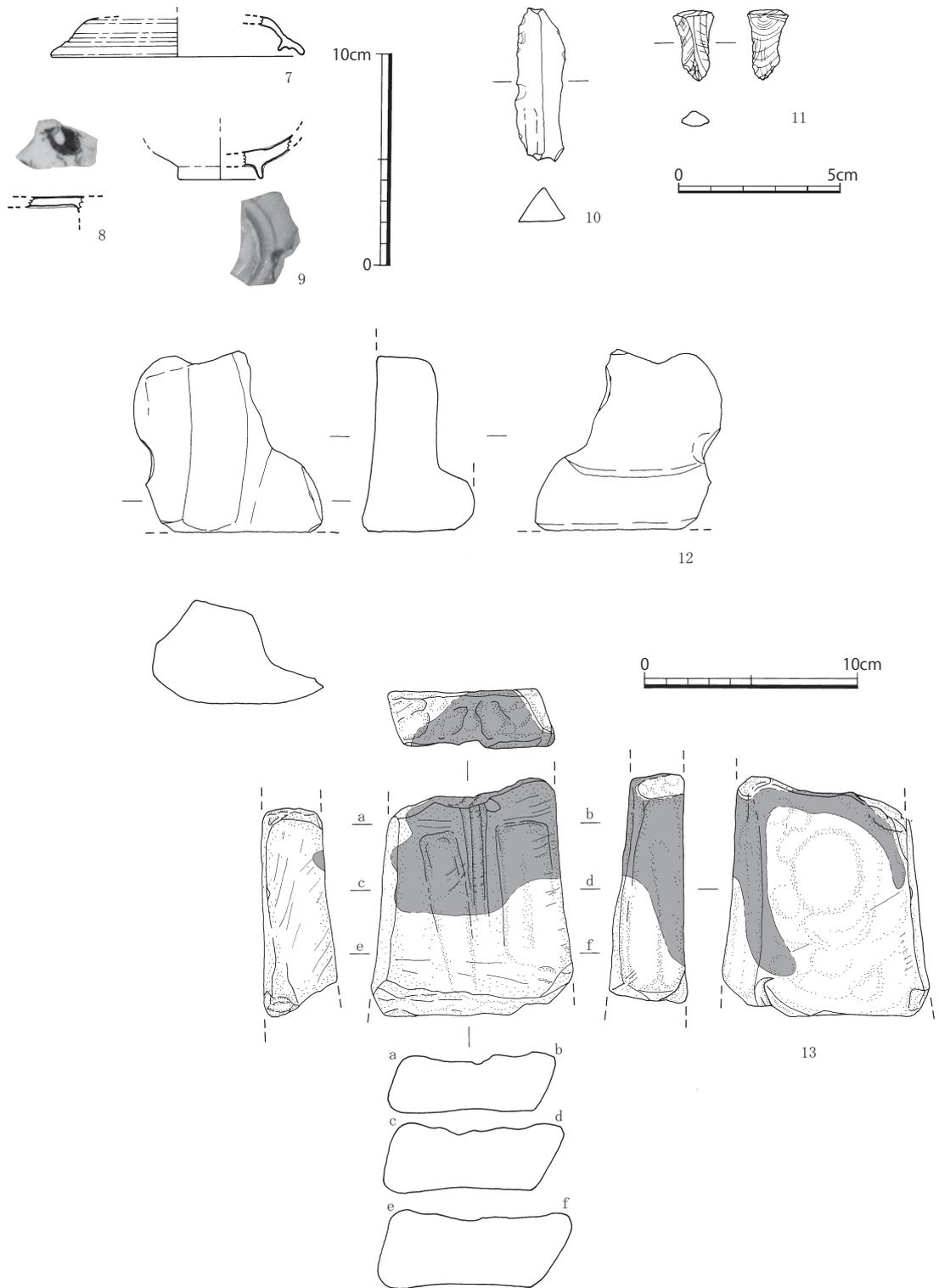
磁器

染付（8、9）

8は碗あるいは皿の底部小片であり、高台が残っていない。内面に鹿の文様が認められる。高台内底部外面に一重巻線文が施される。9はいわゆるくらわんか碗の底部小片である。高台接地面は露胎で、内面を部分的に釉剥ぎしている。



第7図 金山遺跡第1次調査地点SD01出土遺物実測図1 (S=1/3、1/4)



第8図 金山遺跡第1次調査地点 SD01出土遺物実測図2 (S = 1/3、1/2)

## 石製品

### 剥片 (10, 11)

10はサヌカイト製で、断面三角形を呈する。上下とも端部を欠く。11は黒曜石製で、最大厚さ0.25~0.3cmと薄い。

### 用途不明石器 (12)

砂岩製で、用途不明であるが、被熱の痕跡、煤の付着などは見られない。

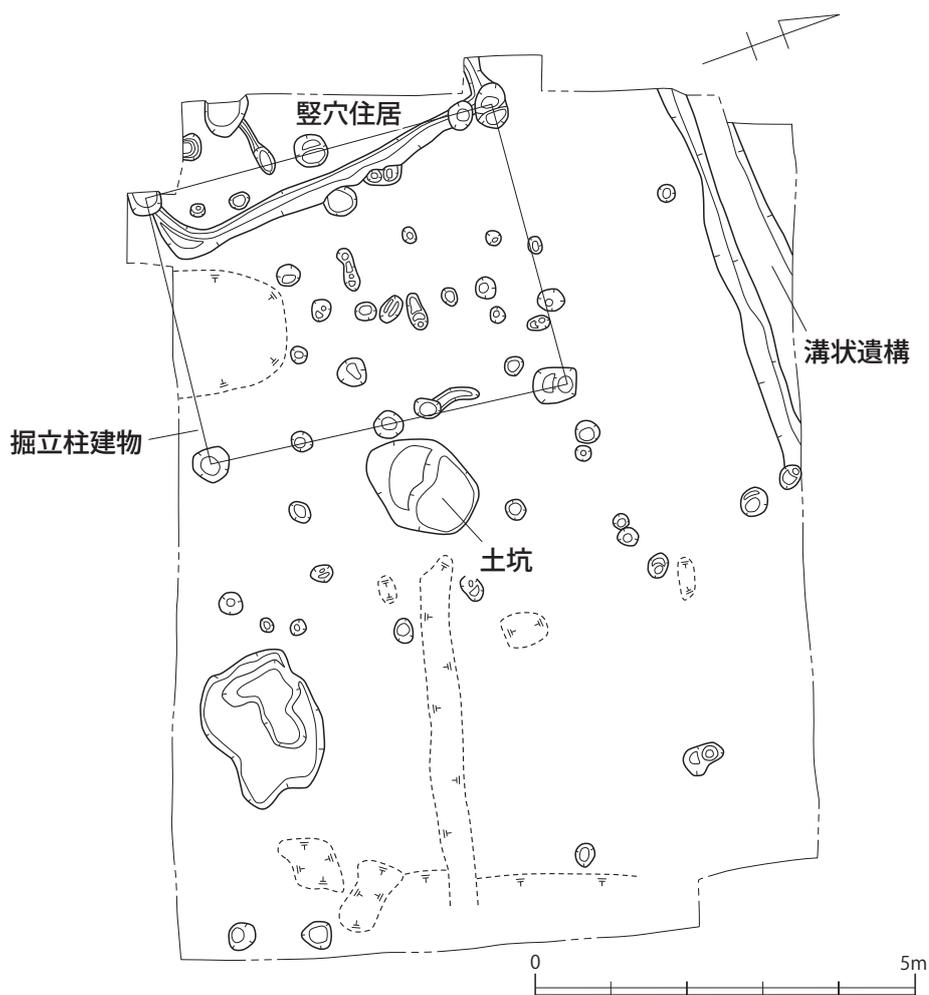
### 砥石 (13)

硬質砂岩製で研ぎ面は4面、上下とも端部を欠損する。被熱の痕跡が4面に認められるが、鋳型を転用したものではない。

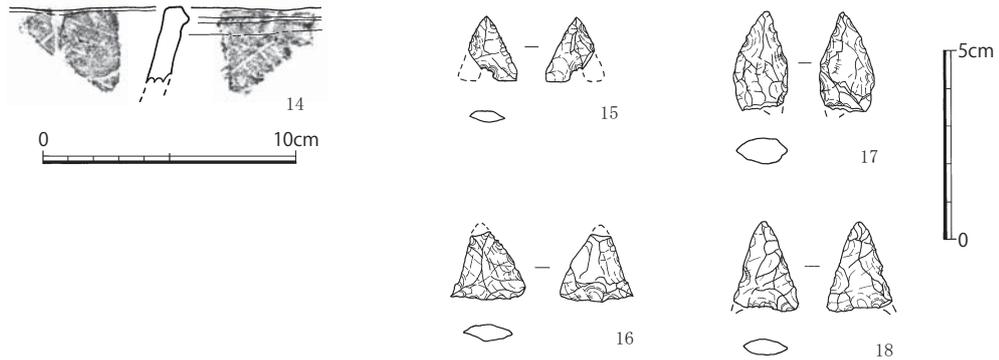
## (3) 小結

### ① SD01について

SD01の埋土中から出土した遺物のうち、最も量が多いのは古墳時代の土師器である。特に6の甕は、溝底面近くにおいて倒立した状態で出土しており、底部穿孔と相まって祭祀行為的な意味合いを感じさせる。



第9図 金山遺跡第4次調査地点遺構配置図 (S = 1/100)



第10図 金山遺跡第4次調査地点出土遺物実測図1 (S=1/3、1/2)

## ② SD01出土の砥石について

砥石は四面を使用しているが、そのうちの一面に幅約1.2~1.7cmの平型のを研いだような痕跡が2ヶ所、幅約0.3cmの丸型のを研いだような痕跡が1ヶ所認められる。前者は鑿のようなものを、後者は矢柄のようなものを研磨した痕跡であろうか。

## 2. 第4次調査

### (1) 調査の概要

調査地は大野城市大城四丁目248-1の一部である。大城山から西へ延びる丘陵上に当たり、標高は26m前後を測る。調査は、平成25年11月26日から同年12月9日にかけて実施し、調査面積は約90㎡である。

調査の結果、縄文時代の土坑、古墳時代の竪穴住居跡、古墳時代~奈良時代の掘立柱建物跡、江戸時代の溝状遺構などを検出し、土師器・須恵器・縄文土器・石器・瓦などが出土した。

### (2) 遺構と遺物

#### ① 土坑 (第9図、図版5)

調査区のほぼ中央で検出され、長軸1.6m×短軸1.2mの楕円形の平面プランを呈し、深さは0.9mを測る。埋土中から時期不明の縄文土器片や石鏃などが出土した。

出土遺物 (第10図、図版7・8)

縄文土器 (14)

断面三角形の突帯を有し、その直下に浅い沈線を斜格子状に施す。胎土中に微細な雲母片を多く含む。縄文早期末頃の資料の可能性はあるが、判然としない。

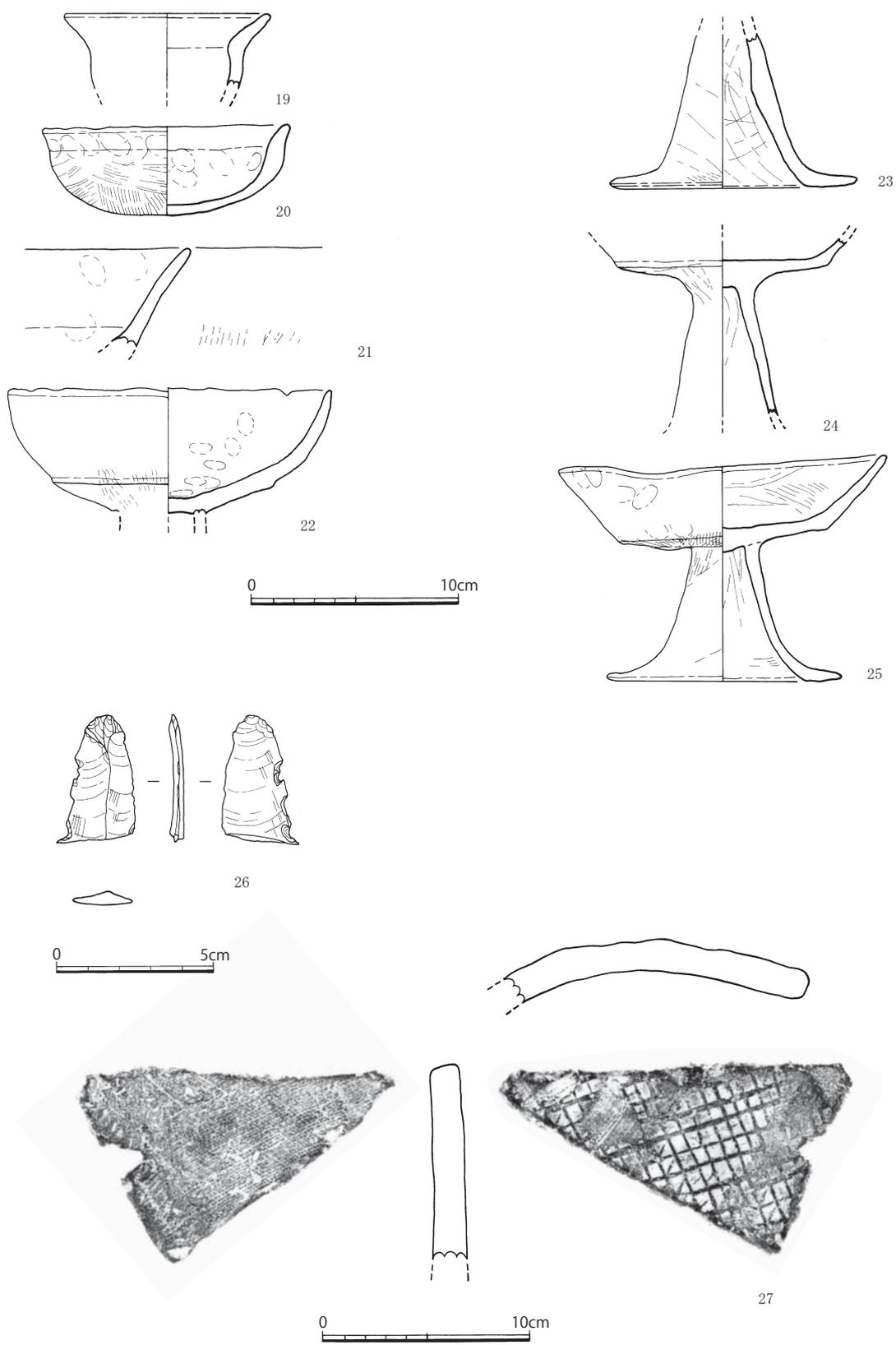
石器

石鏃 (15~18)

15~18まですべてサヌカイト製である。15は片脚を欠く。16は平基式鏃で先端を欠く。17は基部を欠く。18は基部の挟りが浅く、片脚の先端部をわずかに欠く。

#### ② 竪穴住居跡

調査区の北西隅で一部確認されたのみであるが、一辺約5mの方形プランであると想定される。支柱穴やカマドは確認できなかったが周壁溝が明瞭に検出され、屋内土坑からは比較的にとまっ



第11図 金山遺跡第4次調査地点出土遺物実測図2 (S=1/3、1/2)

た量の土師器が出土した。古墳時代中期のものと考えられる。

出土遺物（第11図、図版8・9）

土師器（19～25）

小型壺形土器（19）

口縁部から体部上位にかけての小片である。内外面とも磨滅が激しいが、口縁部外面にわずかに回転ナデの痕跡が残る。

小型丸底壺（20）

完形。底部から体部にかけて器壁が厚い。焼成は良好で、径3mm以下の白色砂粒と微細な雲母片が含まれる。調整は、底部外面にハケ目を施し、体部外面は指オサエの後回転ナデを施す。内面の調整は磨滅のため不明だが、わずかに指オサエの痕跡が残る。内面の一部に煤が付着する。

高杯（21～25）

21は杯部の体部のみの小片である。内外面とも磨滅のため調整が分かりにくいだが、外面下部にハケ目の痕跡、内面に指オサエがわずかに認められる。22は杯部のみの残存である。底部外面と体部外面の境に段が付く。内外面ともに磨滅が激しいが、底部外面にハケ目、底・体部内面に指オサエの痕跡がわずかに残る。23は脚部のみの残存で、残存高7.5cmを測る。全体に磨滅しており調整はわかりにくいだが、脚端部付近の内面に回転ナデの痕跡が認められる。24は残存高8.6cmを測り、脚部内面にわずかにシボリ痕が認められるが、それ以外の調整は磨滅のため不明。25も全体的に磨滅しているが、杯部の底部外面にハケ目、体部外面に指オサエと回転ナデ、体部内面にハケ目と回転ナデを施す。脚部は、外面に斜方向のハケ目がわずかに認められる。

石器

縦長剥片（26）

下部を欠損している。黒曜石製。

### ③ 掘立柱建物跡

現況で1間×2間分確認でき、さらに調査区外へ広がる可能性がある。所産時期は判然としないが、竪穴住居跡を切っており、柱穴内からは須恵器が出土しているが、小片のため図化できない。

### ④ 溝状遺構

調査区の北東隅で確認された。確認された限りでは、直線状に東西方向に延びており、最大幅0.95m、最大長さ5.5mを測る。東西とも調査区外に続き、南側の壁は立ち上がりの途中で傾斜が変化する。遺物の出土状況から、江戸時代に埋没したものと思われる。

出土遺物（第11図、図版9）

瓦

平瓦（27）

残存長10.1cm、残存幅15cm、最大厚1.7cmを測る。凸面の格子目は正方形に近いが、やや縦に長い（一辺0.5～0.7cm）。凹面には布目痕が残る。焼成は良好で灰白色を呈するが、全体的に磨滅している。そのため、側縁を面取りしているようだが不明確である。

### (3) 小結

#### ① 縄文時代の土坑について

当該時期の土坑は、第2・3次調査でも確認されており、第3次調査の報告者は狩猟活動との関連を指摘している。今次調査で確認された土坑についても、石鏃が4点出土しており、同様の可能性が考えられる。

#### ② 古墳時代中期の竪穴住居跡について

同時期の竪穴住居跡は、第3次調査でも確認されており、この時期には集落が営まれていた可能性が高い。ただし、集落の規模や存続期間などの詳細については、現段階では不明である。

### 3. まとめ

金山遺跡で、これまでに4度行われた発掘調査によって検出された主な遺構とその時期をまとめると次のようになる。

金山遺跡検出遺構一覧表

時代	縄文		弥生				古墳			江戸			検出遺構
		晩期	前期	中期	後期	終末期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	
調査回数	1次調査												溝
	2次調査												土坑
	3次調査												竪穴住居跡
	4次調査												竪穴住居跡
													溝

以下、時代ごとに金山遺跡の性格の変遷を考えてみたい。

#### (1) 縄文時代

金山遺跡の所在する大城山西麓では、古くから縄文時代の石鏃が表面採集されており、東に約700m離れた中ノ原遺跡では、1948年から1951年にかけて1,000点以上が採集されている。

金山遺跡で言えば、第3次調査で検出された縄文時代の土坑が落とし穴状遺構とされており、今回報告する第4次調査で検出された土坑も、狩猟活動に関連していた可能性がある。また、金山遺跡から北に約1.1kmの位置にある薬師の森遺跡でも多数の落とし穴状遺構が検出されており、これらについても縄文時代の所産である可能性が高いとされている。

以上の状況、及び周辺における大量の石鏃の遺存から、縄文時代の金山遺跡では活発な狩猟活動が行われていたものと考えられる。また、これまでの調査では定住のための遺構が確認されていないことから、「狩猟場」としての土地利用がなされていたと想定される。

#### (2) 弥生時代

弥生時代には、福岡平野全体で遺跡数が増加する。とりわけ沖積地内に形成された台地や微高地上には、板付遺跡や須玖遺跡群等の集落と墳墓群を備えた拠点集落が展開するようになる。一方で、金山遺跡周辺に目を向けてみると、本市の御笠川東岸には、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、ヒケシマ遺跡等の集落及び墳墓群が前期から連続して存在するものの、金山遺跡ではこ

れまでそれらの遺構は検出されていない。試みに、当地域での拠点集落とされる須玖岡本遺跡からの直線距離を計測してみると、前述の各遺跡の中で最も東に位置する森園遺跡で約3.6km、金山遺跡で約3.9kmと大きな差はない。従って、このような差異が生じた主な原因は、森園遺跡等弥生時代の遺跡が、沖積地もしくはその中の台地、微高地に位置するのに対し、金山遺跡が大城山の山麓に位置するという立地の違いにあるものと考えられる。

以上の通り、金山遺跡では弥生時代には集落や墳墓が営まれなかった可能性が高い。ただし、第1次調査SD01及び第3次調査SC01埋土中から、ごく少量ではあるが終末期の弥生土器が出土していることから、何らかの土地利用が行われていた可能性は否定できない。

### (3) 古墳時代

古墳時代になると、大きな変化が現れる。先ずは集落の形成である。前述の第1次調査SD01及び第3次調査SC01埋土中から、大量の古墳時代前期の遺物が出土し、集落の形成が始まったことを示している。これまでの調査結果では、この集落は古墳時代中期までは存続することが確実である。また、第4次調査で検出された掘立柱建物跡は、古墳時代中期の竪穴住居跡を切っており、より新しい時期にも集落が連続している可能性を示唆している。

金山遺跡の周辺を見ると、大城山西麓では5世紀前半から古墳の築造が始まる。直径30mで竪穴式石室を有する笹原古墳、全長36.5mで帆立貝式前方後円墳である成屋形古墳、豊富な副葬品が出土した古野古墳群8号墳がよく知られているが、未調査で消滅したものも少なくないと思われる。

その後、6世紀半ば以降集落が形成され始める。善一田、古野、原田、薬師の森等の遺跡群及び乙金窯跡がこの時代の遺跡である。6世紀後半になると集落は薬師の森遺跡に集約され、善一田古墳群、王城山古墳群等乙金古墳群が築造される。これらの遺跡群と金山遺跡の関係については、今のところ明確にできていない。この点については、今後の調査の進展に期待したい。

### (4) 近世の遺構・遺物について

第1次調査でSD01埋土中から肥前産のくらわんか茶碗が出土し、第4次調査では江戸時代に埋没した溝が検出されている。前者は溝埋没時における混入であろうし、後者についても調査範囲があまりに狭小なため詳細は不明である。この時代における金山遺跡の性格についても、今後の調査の進展に期待したい。

#### 参考文献

- 浜田信也、酒井仁夫 編『中・寺尾遺跡』大野町の文化財第3集 1971
- 酒井仁夫 編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X VII』 1977
- 舟山良一 編『笹原古墳』大野城市文化財調査報告書第15集 1985
- 向 直也 編『森園遺跡 I』大野城市文化財調査報告書第26集 1988
- 向 直也 編『御陵前ノ椽遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集 1997
- 宮崎亮一 編『成屋形古墳』太宰府市の文化第38集 1998
- 舟山良一 編『ヒケシマ遺跡』大野城市文化財調査報告書第67集 2005
- 渡邊和子 編『金山遺跡 I』大野城市文化財調査報告書第99集 2012

- 坂井貴志 編『金山遺跡Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第127集 2015  
 上田龍児 編『乙金地区遺跡群18』大野城市文化財調査報告書第145集 2017  
 上田龍児 編『乙金地区遺跡群21』大野城市文化財調査報告書第157集 2017  
 上田龍児 編『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書第159集 2017



1. 御陵前ノ椽遺跡
2. ヒケシマ遺跡
3. 森園遺跡
4. 中・寺尾遺跡
5. 善一田遺跡・古墳群
6. 王城山遺跡・古墳群
7. 古野遺跡・古墳群
8. 薬師の森遺跡
9. 金山遺跡
10. 笹原古墳
11. 成屋形古墳

第12図 大城山西麓主要遺跡位置図 (1/15,000)

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	法量 (cm・g) ①口径 ②器高③底径④最大径 * (復元値) <残存値>	形態・技法の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
1	弥生	大型甕	①(59.7) ②<19.3>	外面 平行タタキ 内面ハケ目 (磨滅により不明瞭)	A: ~4mm以下の白色砂粒・石英・長石含む B: 良好 C: 内7.5YR8/4浅黄橙色、外7.5YR8/3浅黄橙色、一部7.5YR3/1(黒班)	外面に黒班あり 2、3と同一個体か?
2	弥生	甕か?	②<12.6>	内外 ハケ目(内面は磨滅のため不明瞭) 外面 突帯(接着部ナデ)	A: ~3mm以下の白色砂粒・石英・長石・雲母含む B: 良好 C: 内10YR8/2灰白色、外10YR8/3浅黄橙色	突帯にハケ原体による斜格子文 1、3と同一個体か?
3	弥生	甕か?	②<4.0>	内外 指オサエ 外面 平行タタキ	A: ~4mm以下の白色砂粒・石英・長石含む B: 良好 C: 内10YR8/3浅黄橙色、外10YR8/3浅黄橙色	1、2と同一個体か?
4	弥生	器台	①(19.2) ②<6.4>	内外 回転ナデ 外面 2条の突帯	A: 微細な白・黒色砂粒・石英・長石・雲母含む B: 良好 C: 内7.5YR7/4にぶい橙色、外7.5YR3/1黒褐色(煤付着)	
5	弥生	ミニチュア土器	②<3.5> ③2.7	内外 不定方向のナデ	A: 微細な白色砂粒・石英・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR7/4にぶい橙色	
6	土師器	丸底壺	①14.6 ②17.7 ④17.4	外面 ハケ目 内面 ケズリ後 ナデ 口縁部内外面 回転ナデ	A: 微細な白・黒色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内10YR7/6明黄褐色、外10YR8/4浅黄橙色	底部穿孔あり
7	須恵器	杯蓋	①(11.9) ②<1.8>	内外 回転ナデ	A: 微細な白・黒色砂粒を含む B: 良好 C: 内外N5/灰色	
8	染付	皿か?	②<0.8>	内外 施釉	A: 精良 B: 良好 C: 素地10YR8/2灰白色、釉調5GY8/1灰色	内面に鹿の文様
9	染付	碗	②<2.0> 高台径(4.0)	内外 施釉 内面 釉剥ぎ 高 台接地面 釉剥ぎ	A: 精良 B: 良好 C: 素地10YR8/2灰白色、釉調5GY8/1灰色	いわゆる「くらわんか碗」
10	剥片		全長4.9 最大幅1.5 最大厚1.1			サヌカイト
11	剥片		全長2.2 最大幅1.3 最大厚0.5			黒曜石
12	石製品	不明	全長<5.5> 最大幅<5.3> 最大厚<3.4>		C: 5YR7/4にぶい橙色	砂岩
13	石製品	砥石	全長7.5 最大幅6.3 最大厚2.4		C: 5YR6/3にぶい橙色	四面使用 被熱による黒変あり 硬質砂岩
14	縄文土器	鉢? 甕?	②<3.3>	口縁部直下に突帯	A: ~2mm程の白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内7.5YR4/1褐灰色、外7.5YR6/4~2/2にぶい橙~黒褐色	口縁部のみ残存 小破片
15	石鏃		全長<1.8> 最大幅<1.3> 最大厚<0.3>			サヌカイト
16	石鏃		全長<1.8> 最大幅<1.9> 最大厚<0.4>			サヌカイト
17	石鏃		全長2.7 最大幅1.4 最大厚0.6			サヌカイト
18	石鏃		全長<2.4> 最大幅<1.7> 最大厚<0.4>			サヌカイト
19	土師器	小型甕形土器	①(10) ②<3.7>	外面 回転ナデ	A: ~1mm程の白・黒色砂粒含む B: 良好 C: 内5YR5/4にぶい赤褐色 外5YR7/6橙色	
20	土師器	小型丸底壺	①12 ②4.4	外面 底部ハケ目、体部指オサエ 後回転ナデ 内面 指オサエ	A: ~2mm程の白色砂粒・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR6/4にぶい橙色	完形 内面に煤付着
21	土師器	高杯	②<4.8>	外 ハケ目 内 指オサエ	A: ~2mm程の白色砂粒・長石含む B: 良好 C: 内外7.5YR7/6橙色	杯部の小破片
22	土師器	高杯	①15.7 ②<6.1>	外 ハケ目 内 指オサエ	A: ~3mm程の白色砂粒・長石・角閃石・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR7/8橙色	杯部のみ残存
23	土師器	高杯	②<7.5> 脚端部径12.1	内 回転ナデ	A: ~3mm程の白色砂粒・長石・雲母含む B: 良好 C: 内外7.5YR6/6橙色	脚部のみ残存

24	土師器	高杯	②<8.6> 脚端部径12.1	内 シボリ痕	A: ~2mm程の白色砂粒・長石含む B: 良好 C: 内外7.5YR6/6 橙色	
25	土師器	高杯	①16 ②11 ③<11.4>	外 ハケ目、指オサエ、回転ナ 内 指オサエ、回転ナデ	A: ~2mm程の白・黒色砂粒・ 雲母含む B: 良好 C: 内外 7.5YR7/6橙色	
26	縦長剥片		全長<4.1> 最大幅<2.5> 最大厚<0.4>			黒曜石
27	平瓦		全長<10.1> 最大幅<15> 最大厚<1.7>	外面 格子目タタキ 内面 布 目痕	A: ~3mmの砂・長石を含む B: やや不良 C: 凸面10YR8/2 灰白色、凹面10YR7/2にふい 橙色	

# 圖 版



①金山遺跡第1次調査地点全景1



②金山遺跡第1次調査地点全景2



③金山遺跡第1次調査地点全景3



①金山遺跡第4次調査地点調査前状況



②金山遺跡第4次調査地点作業風景



③金山遺跡第4次調査地点完掘状況



①金山遺跡第4次調査地点  
SC01検出状況



②金山遺跡第4次調査地点  
SC01土層



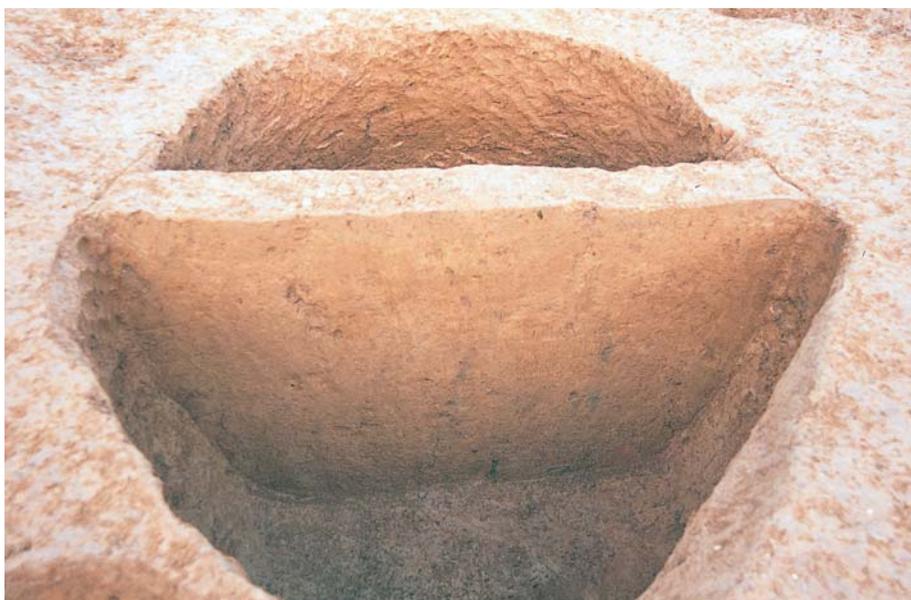
③金山遺跡第4次調査地点  
SC01床面検出状況



①金山遺跡第4次調査地点  
SC01完掘状況



②金山遺跡第4次調査地点  
SC01屋内土坑遺物出土状況



③金山遺跡第4次調査地点  
SX01土層



①金山遺跡第4次調査地点  
SX01完掘状況



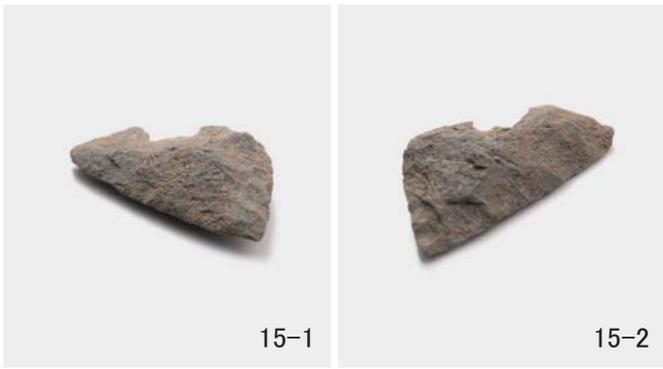
②金山遺跡第4次調査地点  
SD01土層



③金山遺跡第4次調査地点  
SD01完掘状況

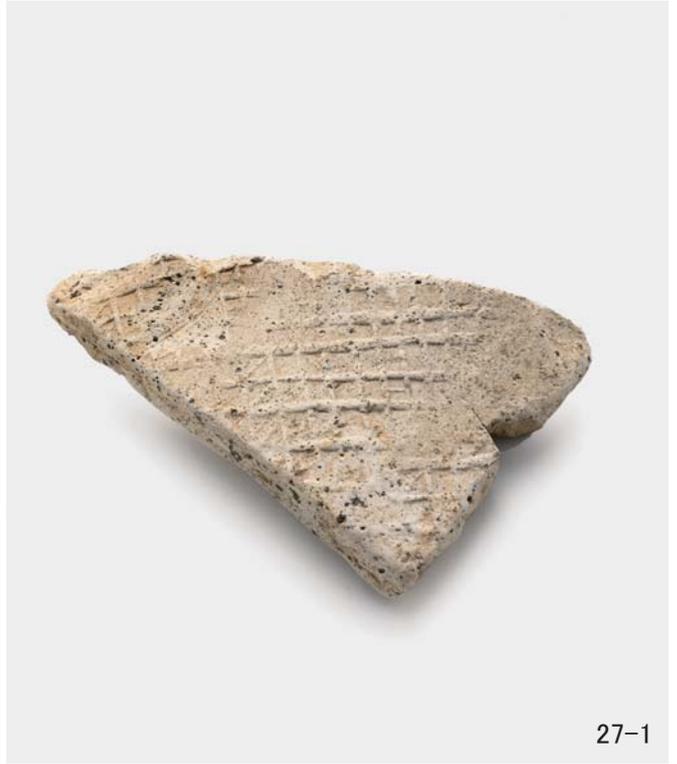








24



27-1



25



26-1



26-2



27-2

# 報告書抄録

ふりがな	かなやまいせき								
書名	金山遺跡3								
副書名	第1・4次調査								
巻次	3								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書第181集								
編著者名	徳本洋一								
編集機関	大野城市教育委員会								
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211								
発行年月日	2020年3月19日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
金山遺跡 第1次調査	福岡県大野城市大城 4丁目252-5他		40219	190114	33° 32′ 3″	130° 29′ 33″	19990917 ～ 19991203	532㎡	宅地造成・ 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
金山遺跡 第1次調査	集落	弥生・古墳	溝		弥生土器・土師器・ 石器				
所収遺跡名	所在地		コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
金山遺跡 第4次調査	福岡県大野城市大城 4丁目248-1の一部		40219	190114	33° 32′ 3″	130° 29′ 36″	20131126 ～ 20131209	約90㎡	個人専用 住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
金山遺跡 第4次調査	集落	縄文・古墳 ・奈良・江 戸	土坑・竪穴住居跡 ・掘立柱建物跡・ 溝		土師器・須恵器・ 縄文土器・石器・ 瓦				
要約	1次調査では古墳時代前期の溝が、4次調査では古墳時代の竪穴住居跡、古墳～奈良時代の掘立柱建物跡が検出され、当該期の集落のあり方を検討する上で貴重な成果となった。また、これまでの周辺の調査では縄文時代の石器のみ出土していたが、4次調査において、縄文時代の遺構が初めて検出された。								

## 金山遺跡 3

第1・4次調査

大野城市文化財調査報告書第181集

2020年3月19日

発行 大野城市教育委員会  
福岡県大野城市曙町2-2-1

出版 九州コンピュータ印刷  
福岡市南区向野1丁目19番1号